

第2章 高鳳蓮中期の剪紙

文と写真 周路

翻訳：有為楠君代

二十世紀90年代の中後期は、高鳳蓮の剪紙にとって、中期の段階と言えるでしょう。この時期、子供たちは既に成人し、舅を見送り、家の経済状況は以前に比べてかなり好転していました。彼女は、多くの時間を剪紙制作に充て、剪紙で生計を立てることができるようになりました。これまでの生活体験や、伝統的な剪紙の図柄に対する潜在的な反発などが、彼女の剪紙の構想に広がりを持たせ、題材を豊富にし、個性的な作品を生み出す原動力になりました。剪紙が彼女にもたらした栄光は、かつて彼女が率先して行動し、範を垂れた村の幹部としての輝きをはるかに上回り、剪紙から得る経済的恩恵は、何十年もの辛酸を極めた人生を償って余りあるものでした。

この時期、テレビ・新聞などのメディアは民間芸術の掘り起こしを開始したところでしたが、陝北民間美術の先駆けとなった安塞県は、老人たちが相次いで世を去り、後を引き継ぐ中年の人々は、古い殻に閉じこもり、先人の模倣にとらわれて次第に先駆者の地位を滑り落ちて行きました。またこの頃から、剪紙などの民間美術品も市場で売られるようになり、多くの民間芸術に携わる人たちは貧困を脱することが出来るようになりました。しかし、売られる剪紙の質は玉石混交で、人気のある剪紙の複製品がはびこるようになり、民間美術本来の意義がすっかり失われてしまったのでした。こんな時期に出現した高鳳蓮の剪紙作品は、各展覧会で脚光を浴び、矢継ぎ早に大賞を獲得しました。専門家や学者たちが高鳳蓮を研究対象として取り上げるようになり、彼女の名声は陝北地方全域に知れ亘ることになりました。

高鳳蓮の作品の特色を一言で述べると、大胆で物怖じしない作風と言うことが出来るでしょう。その最大の特徴は、全ての動物・人物の形態が、実際の具体的形状を抜け出して、一見、茫洋としているのですが、図柄を子細に見ると異なった物の形が合わさって成り立っています。

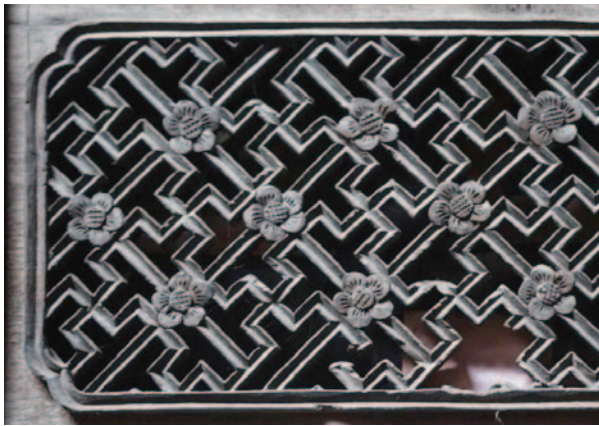
高鳳蓮の剪紙における人物の眼は、初期のころから、伝統的な丸い目玉や魚型の眼の形ではなく、代わりに2本の線で弧を描いたり、或いは花の形のような模様を使ったりしています。高鳳蓮によれば「人間の眼は、キラキラ輝いています。花を目にすれば、目の表情が伝えられます」と言います。高鳳蓮の剪紙の中の男性の眼は、一般に牡丹の花で、女性の眼は蓮の花で表します。牡丹は富貴の、蓮は純潔の象徴だからだそうです。

彼女は、竜王の剪紙の中で、両眼を2匹の小さな竜に替え、両腕、両足、両方の耳にも竜を飾りに付けました。竜王本体に、8匹の小さな竜を加えることで、全部で9匹の竜を描きました。九と言う数字は、民間では無限の意味を持ち、竜王が万能であることを表します。人々は、竜王を祀り、竜王に気候の順調、五穀豊穰、国家安泰、一家団欒を祈るのです。90年代の高鳳蓮の剪紙は、ますます個性的になり成熟して行きました。

高鳳蓮自身の構想で剪られる作品が増していく中で、剪紙の題材は、太古の神話、民間伝説、身近諸事へと広がって行き、「仙女降下」、「竜人」、「スズメを飲む蛇」、「竜王」、「梁山伯と祝英台」、「二十四孝^注」、「黄河を渡る」、「糸紡ぎ」、「地を耕す」、「老いた二人」など、彼女がそれまでに見聞し、或いは経験したことが剪紙作品として生み出されて行きました。造形は更に大胆に、奔放になり、人情味溢れるものになって来ました。民間美術研究者の啓発によって、「天を知り、地を知り、祖先を知り、神を知る」を表す符合「卍」が剪紙の装飾に付けられるようになりました。

著名な剪紙研究者である靳之林氏が、自著「中国民間剪紙と高鳳蓮の剪紙芸術」の中の一文で、次のように評価しています。

「高鳳蓮の剪紙の虎は、自然界にいる虎の形ではなく、虎で天を表し、太陽を表して、止むことなく輪廻



かんなん
皖南(安徽省長江以南の地域)古民家の中で
使用されている「卍」の窓格子



「飛ぶ馬」の「卍」

れたといえます。

そこで、私は高鳳蓮の動物、草花、人物などの図形を早期から最近の作品までを調べてみて、単独の図柄にしる、複数の図柄を組み合わせたものにしる、形式的に似通っているの

を繰り返す丸い宇宙を表現している。「卍」の符号を使用して、止むことなく巡る天・太陽・宇宙の輪廻を表現することで、原始哲学の符号「卍」の意味をさらに深め、発展させているのだ。更に虎の四肢を、大胆にも四方へ広げ、虎と「卍」の形を合わせることで、生き生きとした芸術的イメージを作り出している。

私は、彼女に訊ねたことがありました。「どうして、虎の4本の足を四方に伸ばすことを思いついたのですか？」彼女はいともあっさりと「これは飛んでる虎よ。天から降りてきたのよ」と答えました。

延安の著名な民族研究者・宋如新氏は、「卍」の字形は、魏の国の古代文字の中では、木を擦り合わせ火を起こすという意味があり、太陽をイメージする文字だったものが、陝北の人々の間で「卍」の模様に変化して、動物の尻尾などの装飾として用いられ、「陽性」を表すようになったものだと話しています。同時に、「万」という文字とのかかわりを持たせて、全てが連なり永遠に離れないとの意味を含み、刺繍の模様などとして多く用いられるようになったのだそうです。

「卍」に関して、経典を紐解くと、「卍」には左回りと右回りと二つの書き方があるのだそうです。仏教的には教義上、左回りが吉と考えられ、左回りが正式とされ、儀式の中でも左回りに行動します。又、違う言い方もあります。卍の左回りは吉祥、右回りは如意と言われ、「他人が傷つけば我が身が痛み、他人が苦しめば我が身が悲しい」という意味を表します。先祖から陝北の地に脈々として受け継がれてきたシンボルが高鳳蓮の剪紙の作品の中に集中して現

を発見しました。虎、口バ、牛、羊、キリンばかりでなく、鶏、兎、人間に至るまで四肢を紙の四角に広げた、図形の展開図のような構図があります。それで、私は高鳳蓮に、何故展開図のような剪紙を剪るのかと訊ねてみました。

「無心に剪っていると空間が出来ることがあるでしょ。四肢は動かすことが出来るので、何処へでも空いた所へ動かすことが出来るからですよ。紙を剪るのは肉を切るのとは違って、自分が望むところへ望むものを剪り出せるのよ。剪紙の図柄は剪紙が大きければ大きい程面白いもの出来るし、素晴らしいものにできるの」との答えが返って来ました。見たところ、専門家の理屈とは別に、高鳳蓮は彼女自身が言うように、心の赴くまま無心に制作しているというのが真実のようです。

私は、陝北地区の人々と交流して30年近くになりますが、この地域は未だに貧しく、生徒や子供たちが、普段は野外で勉強していて、思い思いに木の枝などを拾って、地面をノート代わりに字を練習している姿を今でも時々見かけます。経済的にも苦しい日々を過ごしてきた高鳳蓮は、節約が身に付いて浪費を嫌う態度が紙に対しても貫かれています。ですから四角い紙の隅々まで模様を剪り込み、空間を作らないことで、紙を有効に使うという訳です。

動物のお尻の上の「卍」のような毛の流れを陝北の人々は「旋子」(渦巻き:つむじの事)と呼んでいて、どの馬やどの口バのお尻や背中にもあるものです。人々は虎を見たことはありませんが、虎にもきつとあると信じているのです。「うちの子どもたちのほど



黄河畔の生活

こにあるだろう」と、陝北の人たちは子供が生まれるや真っ先に子どもの頭のつむじ、つまり「卍」のありかを調べます。そんな訳で高鳳蓮は四肢を自由に広げて飛ぶ馬の図・「飛ぶ馬」にも「卍」を剪ります。そうすること

とでこそ剪紙の四角(よすみ)の空白部分がなくなり紙の無駄が省けるというものです。

同時に、高鳳蓮は、剪り落した紙屑も決して安易に捨てたりしないで、何気ない模様を剪って生かします。高鳳蓮にとって浪費をしない、材料を無駄にしないことはとても重要なことなのです。慢性的に水不足の陝北地方では食器や鍋を洗った水を家畜の飲み水にするのと同じ考え方ですが、このような黄土高原の村の女性の何気ない行動が、研究者にとっては、長年続けて来た研究の確証を得るヒントになっているのです。

喜んで、心の儘に剪る。黄土高原に住む高鳳蓮にとって、剪紙の図柄は自然に湧き出てきます。剪り出すものは、自分自身の生活です。孫が結婚した時は、高鳳蓮の家に村中のひとたちが次々にやって来てお祝いの宴に連なりとても賑やかでした。接待の準備をする高鳳蓮は十歳以上も若返ったようでした。新娘(花嫁)の部屋の中央に飾られた、結婚を祝う大きな剪紙「喜花」は高鳳蓮が結婚式のずっと前

から心を込めて剪り出しました。

黄河河畔に住む人びとにとって人と水の関係は密接であり、舟を曳いたり、舟のカイを操ったり、泳いだりどれもが剪紙の題材です。高鳳蓮は、何時も昔を思い出します。黄河を渡って、山西省ヘトウモロコシを売りに行った苦しかった歳月、でもそれは同時にその後の生活の貴重な経験となりました。

「昔から、夫婦は林の中の鳥と同じと言われます。男の人は木で、女の人はそれを頼りにします。女は小鳥、木が大きければ、小鳥は安心して休めます。どんな時でも、自分の夫の値打ちを下げたはいけません」。男性は牡丹の花で飾り、女性は蓮の花で飾ります。男性は土、女性は水、二つが合わさって、人が生まれます。頭は天、足は地、陰陽が合わさって、万物は繁殖して行くのです。天・地・太陽が相和して命は継続していくのです。剪紙の題材にはまた、「ひょうたん栽培」と言う図柄があり、画面いっぱいのひょうたんで子孫繁栄を表し、家運の隆盛を祈ります。

高鳳蓮が、閉鎖的な黄土高原の窑洞の中で、一途に彼女の生活・祈り・望み・経験した事柄を剪紙の作品に仕上げている時、中国の伝統的な文化を研究する学者たちは、遂に、高鳳蓮の作品の中に、中国古来の宇宙観を見たのでした。学歴がなく、文字も知らない陝北の老婆である高鳳蓮の潜在意識の中に、太古から人類に伝えられている情報を見出したのです。これは正に、コロンブスの新大陸発見の現代版ともいえるような発見でした。芸術作品は作者自身の心の吐露であり、同時に地域の文化として豊富に積み重ねられたものが今なお強い生命力を有し民間芸術家の手を借りて色濃く滲み出ていることを私た



糸を紡ぐ



老夫婦



吉兆(カササギが枝に止まる)



羊の放牧



弾き語り



山里の人

ちは知っています。文化として積み重ねられたものは子子孫孫へ、意図的に伝えられなかったとしても、その地の自然・風土が、人々の心の中に以心伝心で伝えるもので、専門の学者たちは、この地に「陰陽結合、万物の生成、万物の継続性など、生々流転と言う中国本来の哲学として伝えられていることは疑問の余地がない」と言います。

このことで、陝北の老婦人・高鳳蓮は、民間芸術の権威者の協力と手助けによって、民間芸術の大家となり、天に通じ地に通じる太古の情報の代弁者となったのでした。この栄光は彼女ばかりでなく、子供や孫たちにも大家となる道筋を用意することになりました。

龍王への崇拝は、毎年の順調な天候の推移と五穀豊穡を祈るものです。他にも龍の神、土地の神への信仰があり、当然のことながら、各家庭の家畜小屋には牛や羊が満ち溢れ、庭には鶏が走り回り、果樹がたわわな実をつけている、春のような穏やかな生

活を祈る気持ちを表現します。

《二十四孝》シリーズの剪紙もあります。同時に、高鳳蓮はいつも、伝統的題材を掘り起こして、剪紙の形式で、物語の寓意を表現しています。



二十四孝 哭竹生笋 (孟宗)

高鳳蓮の心は正真正銘の陝北女性で、どんな栄誉を与えられても、例え仏の座を与えられたとしても、窑洞での生活、畑仕事、家畜の世話、長年連れ添った夫と子供たちの世話を放棄することはありません。苦勞の多い高原の農地であっても、それは祖先から受け継いだものであり、家族の根源であるのですから、それがなくなれば、全てが断ち切られ、剪紙を通して行う太古との対話も出来なくなると考えているのです。この地で歌われる民謡《信天游》が言うように「故郷の過酷さは分かっている、努力を重ねて守り抜く、忍耐を重ねた先人の苦勞を忘れまい」なのです。

家族そろって和気あいあいと暮らす日々が、高鳳蓮の一生の望みです。

■注

二十四孝(にじゅうしこう): 中国古来の代表的孝子24人をいい、また彼らの逸話を収めた同名の幼童の教訓書をいう。
(日本大百科全書より抜粋)



親子孫 3代の団らん